

吉川高代寺五輪塔

分類 五輪塔
年代 文和三年（一三五四）
所在 吉川高代寺境内



高代寺から川西市横路に通じる小径を一五〇mほど行ったところ、道の左上に五輪塔数基が並ぶ墓地がある。

向かつて一番右側の高さ二五cmの五輪塔が最大で完全な姿をとどめている。花崗岩製で各輪の四方に四門（発心門・修行門・菩提門・涅槃門）の梵字を刻む本格的な塔である。正面の地輪の梵字「アー」の左右に次の銘文がある。



文和三年 甲午
二月廿日 孝子 敬白

南北朝時代一三五四年の造立である。この塔は、源仲頼の塔と伝えられているが、高代寺旧記には、「吉川源仲頼は澤岸頼潤と号し、文和三年甲午二月二十一日八十三歳にて歿す」と記されている。豊能町には中世の五輪塔は少なく、南北朝時代のもはこの塔のみで、町内最古の五輪塔として貴重なものである。

五輪塔は密教の五大思想に基づくもので、塔の構造は下から地・水・火・風・空輪と呼ばれている。



文和三年 甲午
二月廿日 孝子 敬白

吉川高代寺表参道の町石

分類 町石
年代 慶安三年（一六五〇）
所在 吉川高代寺表参道



第十二番目の町石



第一番目の町石

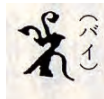
吉川の平井川に架かる山浦橋の西詰に町石が建っている。ここから始まる七宝山高代寺への表参道の第一番の町石である。石英閃緑岩、高さ一〇六cmの舟形をした粗仕上げの石の表面に



七宝山 慶安三年 立
一町従是十二町法印秀栄□
高代寺 卯月八日 之

と刻まれている。「バイ」は薬師如来の梵字で、高代寺の本尊を現している。これから表参道に沿って合計十二基（内五と十と十一町石不明）の町石が建てられている。

第十二番目の町石は高代寺入口の鐘楼下にあつて、高さ八三cm同じような形で表面に

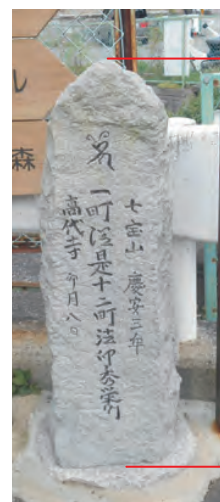


慶安三年
十二町願主大僧都法印秀栄立之
卯月八日

とある。他の町石には「バイ」と町数が刻まれているだけである。なお、秀栄は第二四世住職、高代寺中興の祖である。



十二町願主大僧都法印秀栄立之
卯月八日 慶安三年



七宝山 慶安三年 立
一町従是十二町法印秀栄□
高代寺 卯月八日 之

吉川高代寺表参道六地藏

分類 地蔵
年代 慶安二年（一六四九）
所在 吉川高代寺表参道



花折街道の山浦橋の西詰に高代寺の町石が建っている。高代寺表参道の中程、六町石と七町石の中間に、白く風化した台形の石があり、像高三三cmの六地藏が彫られている。像の左右に、風化して判読困難だが、次の刻銘がある。

（右側） 願主当村玉手喜兵衛
正次

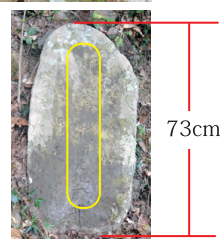
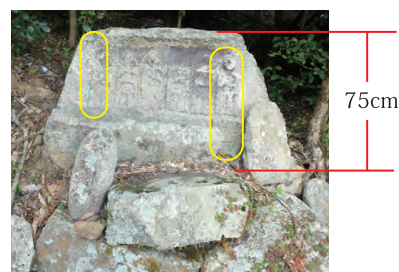
摂込能勢郡吉川村七宝山高代寺

（左側） 慶安二年六月廿四日（一六四九）
并當村中

玉手喜兵衛の文字は現在殆ど判読できないが、『東能勢の石の文化財』初版によって補った。玉手喜兵衛は吉川村の郷土で正保年中（一六四四～四七）に現在の考園寺（こうきゅうじ）を修覆再興した人である。また高代寺の秀栄住職とも協力して高代寺修復に尽力した。六地藏はそれぞれ持ち物が違っており、六道能化の姿を表している。

この石仏の少し手前にも風化して、はつきりしないが、高さ七三cmの碑がある。中央に「六道能化南无地藏（菩薩）」と刻み、左右に六地藏を表す六種の梵字を刻んでいる。

（※井は、菩薩の異体字无は、無の異体字）



六道能化南无地藏井

（右側） 願主当村玉手喜兵衛
正次
（左側） 摂込能勢郡吉川村七宝山高代寺
慶安二年六月廿四日
并當村中

吉川高代寺宝篋印塔

分類 宝篋印塔
年代 享保元年（一七一六）
所在 吉川高代寺境内



高代寺本堂への石段西側の墓地には、六基の宝篋印塔がある。

享保元年（一七一六）銘の宝篋印塔は塔の高さ一四三cm、下の基壇も含めると総高二三〇cmある。塔の基礎北面に、宝篋印塔の功德を称え、この塔を建立することによって現世安樂、後世浄土を祈る願文を刻み、大阪の岸部屋利兵衛が建立した旨記されている。一二人の法名があり、一族の供養塔として建立されらしい。

他の五基の宝篋印塔も、享保から文化年間（一八〇四～一八一七）にかけて建立したもので、いずれも一門の供養塔として建立したものと思われる。前記と同様な願文や光明真言、又は宝篋印陀羅尼經を表す梵字「シチリヤ」を刻んでいる。施主は横路村上浦甚兵衛・北市左衛門等の名がある。塔身には月輪を浮き出し、中に金剛界四仏の梵字を刻んでいる。

宝篋印塔は元来宝篋陀羅尼經を納める塔の事であるが、中世には供養塔として多く造られ、江戸時代には独特の形に変わり、墓塔としての性格が強くなってきた。



寶篋印塔功德佛結所 非言語之所 矣現世則七難即滅七福即生當來三塗忽化九品必成面 雖極惡人一見 必結善緣何 況信心之人手 今願建立 塔 願以此功德自他平等現世安樂後世浄土 享保元丙天七月撰易大阪施主岸部屋利兵衛

〔正面〕 念譽宗仙信士
光譽智禪尼
正葉散道保信士
夏月妙保禪尼

〔裏面〕 月光宗善信士
臨山宗覺信士
雲道洪居士
觀月壽孝信女

〔左面〕 釋善正 妙善
秋月智讚信士
宗順 釋善童女
智道清



230cm

吉川八幡神社の鳥居・石燈籠

分類 鳥居・燈籠
年代 鳥居 元禄五年（一六九二）
燈籠 享保五年（一七二〇）
所在 吉川



（右柱）
元禄五年
（左柱）
壬申九月吉日

この社は多田満仲（源満仲）の四世越後守頼仲（頼国二子）が治暦年間（一〇六五～一〇六九）吉川城在住の折に創建されたものといわれている。

源頼仲が祭神を吉川に祀り、領地・住民の安泰を守護した。

明治元年（一八六八）神道の強化が進められた。祭政一致をめざして神道と仏教を分離した。

神仏分離政策によって仏教排斥運動が各地におこり、八幡神社の仏像・経文など全て破棄され、明治三年高代寺から独立した。以来、神職を置いて奉祭することとなった。

明治五年に村社に格付けされ、同四十五年五月二十三日字保の谷の無格社八幡神社（応神天皇）を合祀する。



十基共
同じ形式・刻印



御神前
享保五庚子年
十二月吉日



152cm



388cm

吉川妙見参道の常夜燈

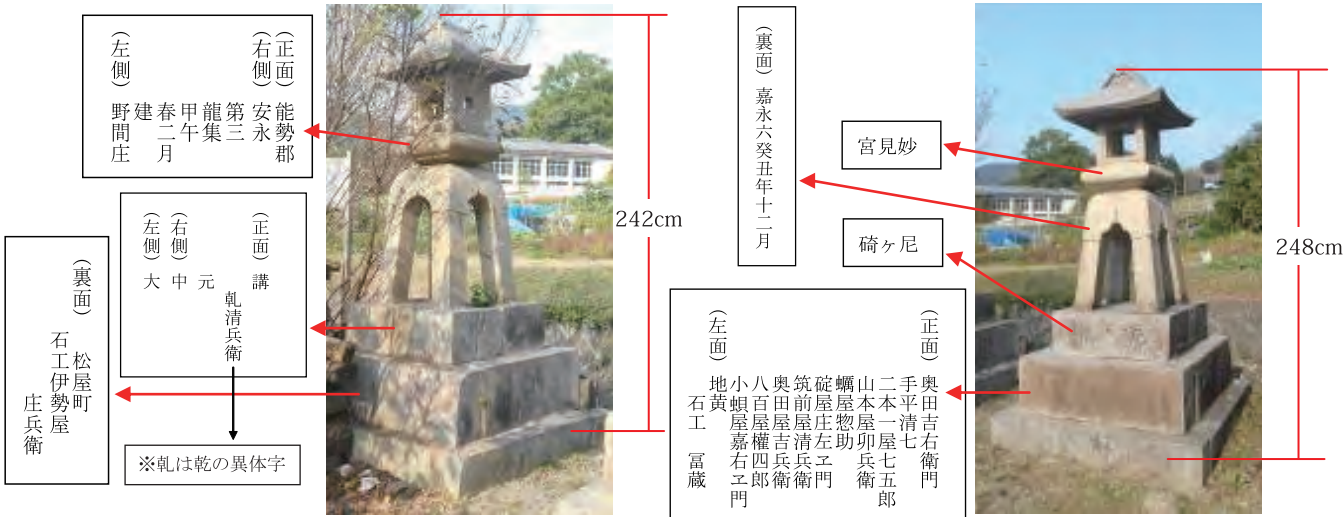
分類	燈籠
年代	安永三年（一七七四） 嘉永六年（一八五三）
所在	吉川中之町



能勢妙見宮への参詣道は、野間口村からの道の三つがあつた。吉川村からの参詣道は、南北に長い同村の集落内を通り、沿道には茶店・宿が並んだ。雨が降ったときには雨やどりの必要もあつたので、世話引受人もいた（吉川区有文書）。夜間に往来する参詣人もあり、その便宜をはかるため各所に常夜燈がつくられた。

吉川村内の参詣道には、現在のところ数基が確認されている。写真の二基は、左の一基が安永三年（一七七四）の建立、右の一基が嘉永六年（一八五三）の建立である。基台に見える「尼ヶ碕」とは建立者が尼崎の人であつたことを示す。この二基の建立時の位置は明らかでないが、後の道路改修工事、交通量の増加などで、二転三転して平成二年に現在の地（吉川自治会館）に移されたものである。

なお、妙見宮からの下向道は、吉川村から南へ古江村（現池田市）を通る長尾街道によって池田に通じていた。館



吉川の大墓（聖人の碑）

分類 記念碑
年代 延宝四年（一六七六）
所在 吉川



高代寺表参道の道標（七町）辺りに、大きな共同墓地がある。地元産の石英閃緑岩（一般的には花崗岩と呼ぶ）を板碑型に加工、周りに額を入れ、その中に「延宝四丙辰（一六七六）」「南無阿弥陀仏三界万霊一切諸」「聖霊」「霜月日」の刻銘がある。この年の旧暦の十一月に碑が造られたことがわかる。

この辺りの地質は花崗岩のため、墓地用地としては大変な苦労があったようである。土葬の場合、穴を掘り土盛りや積石を使い故人が浄土に往生できるよう追善供養をするのであるが、度々獣類に墓を荒されていた。これを安倍晴明の呪禁により、邪気・獣類を制圧して害を退けることができた。

聖人安倍晴明の徳を慕って建てられた碑である。



延宝四丙辰 聖
南無阿弥陀仏三界万霊一切諸
霜月日 霊

59cm

年代 宝暦六年（一七五六）
所在 吉川下之町



天正元年（一五七三）、塩川軍（現川西市）によって取り囲まれて落城した。「吉川城」よりはるか六〇〇年前の古城である。

また、城の裾に西方寺が建っている。境内の手水石には、

と銘刻される。南呂日（なんりよび）は旧暦の八月の異称である。過去数度の火事に合い、手水石にも火が入っている。



寶曆六丙子歲南呂日
西方寺
施主
中村五左衛門

吉川旧妙見山道の鳥居

分類 鳥居
年代 寛政五年（一七九三）
所在 吉川上之町



吉川の集落の中心部から能勢妙見宮までの旧参詣道は、二五丁（約二・七km）の坂のある山道である。吉川の集落はすれに、周囲約二百三十間（約四〇〇m）の上杉池があり、この堤を過ぎると大きな鳥居がある。ここからは急な山道となる。鳥居に

右柱 （表面）「奉獻」

（裏面）「皆寛政歳舎癸丑仲夏吉辰、

施主堺屋善蔵」

左柱 （表面）「大坂開眼講」

（裏面）「施主道頓堀五右衛門町

伊勢屋利兵衛」

と刻す。寛政歳舎癸丑は寛政五年（一七九三）、仲夏は陰暦五月である。右の柱の近くに、弘化三年、開眼講によって、石段、敷石が造られたことを記した建設記念碑がある。幕末には、鳥居付近は同講社によつて整備されていたことがわかる。鳥居の左右にある三基の燈籠のうち、二基は天保四年（一八三三）、一基は嘉永七年（一八五四）の建立である。二基の燈籠には「世話人 吉川村津国屋善助」の刻字があり、津国屋は現在も続いている。

なお、鳥居下の上杉池は、正徳二年（一七二二）につくられた。



右柱 （表面）「奉獻」
（裏面）「皆寛政歳舎癸丑仲夏吉辰、施主堺屋善蔵」
左柱 （表面）「大坂開眼講」
（裏面）「施主道頓堀五右衛門町伊勢屋利兵衛」



425cm

吉川保の谷子安地藏

分類 年代 所在
地蔵 不詳 吉川保の谷



阿弥陀さんのお堂の近くに、保の谷の子安地藏さんのお堂があります。

いつもお茶やお花が供えられ、みるからに幸せそうなお地藏さんです。

昔このお地藏さんは、人もめったに通らないような山あいの道端に、捨てられたように、ころがっていたそうです。

それではあまりに、もったいないので、保の谷の先祖の人が持ち帰り、ねんごろにお祀りし、今にいたっているということです。

以前は個人の屋敷内にお祀りしていましたが、最近になり人通りの多い現在の地に移され、人々に親しまれています。

近所の子ども達がかくれんぼをして遊んだ時など、おさがりをいただいたりした思い出のお地藏さんでもあります。

「豊能町の民話より」

※地藏と呼ばれているが、阿弥陀石仏と考えられる。



吉川新妙見山道の丁石

分類 丁石
年代 大正十年（一九二二）
所在 吉川



吉川を通る能勢妙見宮への参詣道は、上杉池の南を通って東へ急な坂道を登る旧参詣道とは別に、上杉池の西を北に進む新参詣道がひらかれた。この丁石は、大正一〇年（一九二二）、新参詣道に建てられたものである。高さ一〇九cmで、目立つ丁石である。

是ヨリ 市外十三

（正面）御山エニ十二丁 妙正講 元 河本壽四郎

（右面） 大正十年二月建之

「御山」は妙見山のこと、ここから十二丁（丁は町とも記し、約二・四km）であることを示す。施主は中津町十三（現大阪市淀川区十三）の妙正講であることを記す。

丁（町）石は、一丁（約一〇九m）ごとに建てられた道標であり、ここから北へ、上杉池を過ぎたところには二丁石がある。この丁石は大正八年の建立で、施主は「西成郡玉手丁大正講」と刻まれている。



（正面） 是ヨリ 市外十三
御山エニ十二丁 妙正講 元 河本壽四郎
（右面） 大正十年二月建之



41 cm

分類	年代	所在
道標	不詳	吉川



右	高代寺
左	山下

この道標は高代寺表参道との分岐点（五町目）にある。道標の下部は失われており、現存するのは上部の四〇cmで、あまり目立たない。しかし、道標の刻銘は鮮明である。

明治三八年（一九〇五）頃、多田村平野（現川西市平野）の一の鳥居から吉川村に達する花折街道が開通するまで、山下道は重要な道であつた。



左右
高山
下寺



吉川考闡寺宝篋印塔

分類 宝篋印塔
年代 文化十一年（一八一四）
所在 吉川中の町



宝篋印塔			
所在地	吉川考闡寺（中ノ町）		
紀年銘	文化十一年五月（江戸時代）（1814）		
石材	砂岩製		
各部と名称	基礎	格狭間	四面の表にシチリヤ（梵字）、裏に文化十一年甲戌五月初五日建之
		反花	反花座
	塔身	月輪 梵字	高さ 18cm×巾 17.5cm×奥 17.5cm 輪郭を配し月輪の中に梵字（金剛界四仏）を入れる。
		軒	二段、上五段は薄く段に組む。笠間45.5cm
	相輪	隅飾	一弧の隅飾、突起は外に大きく反り返る。中に渦巻の模様が入る
		伏鉢	下向きの弁を薄く刻む
		請花	完存（上向きの弁）
		九輪	完存
		請花	複弁の請花（上向きの弁）
		宝珠	完存
総高	174cm	基壇、基礎、塔身、笠、相輪	

吉川考闡寺の墓地内に宝篋印塔が二基建っている。

この塔は考闡寺の檀家の供養塔と思われる。江戸時代の造立で高代寺の塔と様式等と同じである。基壇（下）に、表十一行、裏三行で銘文がある。基壇の上辺の反花は下向きの弁である。正面基礎部にシチリヤ（梵字）が刻まれ、宝篋印塔を表している。石材は砂岩製である。



吉川考闡寺地蔵菩薩弥陀

分類 地蔵菩薩弥陀
年代 嘉永二年（一八四九）
所在 吉川中之町



当初は吉川紫雲院考闡寺と称し、池田法園寺末にて浄土宗に属していた。現在は浄土宗総本山知恩院の直末である。

天正年中（一五七三—一五九二）吉川久太夫正家なる人の創建で、元高久寺と称し、高代寺の支配下の寺で宗派は真言宗であった。後に高代寺住職景運なる人と当村檀家と紛争が生じ、檀徒等は改宗し浄土宗となる。正保年中（一六四四—一六四八）頃より考闡寺と称するようになった。

・本尊：阿弥陀仏

・脇侍：観音菩薩、勢至菩薩

嘉永五年（一八五二）に火災、堂宇ごとく灰塵に帰す。安政二年（一八五五）二月二七日、再建落慶し現在の堂宇である。

境内に地蔵菩薩弥陀一體（体）、墓地内には宝篋印塔（二基）が建っている。又墓地内には創建当時の物と思われる小石造物が数多ある。



〔側面〕



嘉永二〇年西月
奉造立主当寺釈譽敬白

吉川徳本上人 八面六字名号碑

分類 名号碑
年代 天保十年（一八三九）
所在 吉川



【徳本上人名号碑】

徳本上人の名号碑は、本町では、これまで牧梅相院境内（六字名号碑）の一基が確認されていたが、吉川井戸城址の下、国道四七七号を挟んだ裾野の個人墓地に新たに確認された。

この碑は、八面塔墓碑（高さ約一四三cm）で、八面に銘文が刻まれている。その一面には六字名号『南無阿弥陀佛』と徳本上人の花押が刻まれている。

あとの七面には十五名の戒名が元禄三年（一六九〇）から弘化三年（一八四六）の没年まで刻まれている。造立年は天保十年とみられる。

平成二八（二〇一八）年一〇月六日には徳本上人没後二〇〇年を迎える。

